

データでみる

復興輪島朝市×全国軽トラ市 in 輪島

2

024年1月1日に発災した能登半島地震は、いまだ復興の途上にある。そのシンボルとなるのが1200年の歴史を持つ輪島朝市である。軽トラ市が、その復興支援に役立つことが出来ないか。そうした願いをもって、8月30日・31日に「復興輪島朝市×全国軽トラ市 in 輪島」が、輪島市内で開催された。

はじめに

輪島市に行くには、金沢市から「のと里山街道」を通行する。走行時間は、概ね2時間15分である。順調に走る自動車専用道路は、輪島に近づくにつれて震災のあとが残り、上下の揺れも多くなる。輪島市に入ると、まだ傾いた電信柱や被災した建物も目に入る。昨年来、この道のりを重ねているので、随分改善されてきたのだが、震災復興にはまだ時間の必要を感じさせる。

こうした条件下ではあるが、能登のシンボルでもある輪島朝市の復興を全国の軽トラ市が後押しすることを目的に、「復興輪島朝市×全国軽トラ市 in 輪島（以下、本事業）」が8月30日・31日に、輪島市マリンタウンで開

催された。晴天の会場には、全国の軽トラ市からの出店、輪島朝市の出店、自動車団体の展示がなされ、約1,500人の参加者が集った（図1）。本稿では、開催への経緯、事業参加者、事業プログラムを紹介したい。

1. 開催への経緯

○軽トラ市と朝市の連携

軽トラ市と輪島朝市との連携は、第1回の出張輪島朝市（以下、出張朝市）に始まる。詳細は、本連載24・25をご覧になっていただきたい。震災からわずか3か月目の2024年3月23日、金沢市金石地区で出張朝市が開催され、筆者を含む軽トラ市関係者が参加した。軽トラ市はどこでも開催が可能であり、朝市復興においてもその可能性があるのではないか、軽トラ市が何らかの復興支援に繋がらないか、という思いからである。

本連載25では2024年9月時点で39回の出張朝市開催と報告したが、2025年8月末には実に223回となっている。1200年間、輪島から出ることがなかった朝市が、外部に進出したのである。「ピンチをチャンスに」と朝市の方々はよく言われる。当事者以外が決して言い得ないことであるが、このマインドを重視することが復興の基軸であろう。

軽トラ市(その28)

愛知大学 三遠南信地域連携研究センター長
地域政策学部教授

戸田敏行

さて、この出会いから、石川県軽自動車協会による軽トラ2台の寄贈、2024年9月に輪島市内で実施した輪島朝市復興軽トラ市となり、新城軽トラ市での復興軽トラ市（2024年11月から隔月開催）、あるいは岐阜市柳ヶ瀬商店街（2025年4月）や金沢市での軽フェス（同7月）等での出張朝市となった。こうした進展を背景にしながら、輪島市現地での軽トラ市開催、出来れば全国軽トラ市を実施して、復興支援に繋げたいという意見が軽トラ市関係者の中で多くなってきた。

○観光庁の支援事業

どのようにしたら全国軽トラ市を輪島市で開催できるか。これは簡単な課題ではなかった。第1に、復興未完の状況で多人数が集まる、しかも地域外から人の集まることが適切かどうかという課題がある。第2に、誰が事業を主体的に推進できるのかということである。従来の全国軽トラ市は、当該地域の軽トラ市が全国大会を誘致する形をとってきた。従って事業の担い手は地元軽トラ市であり、集客は1万人を下ったことがない。これを輪島市内で実施し、被災している輪島市朝市組合が担うことは困難である。

丁度そうした折に輪島市から朝市組合に提示されたのが、観光庁の「能登半島地震から



図1 会場となった輪島市マリンタウン

の復興に向けた観光再生支援事業」であり、筆者も参加して応募することとなった。この中では、戦略としての①輪島朝市復興ビジョン、実施事業としての②輪島市内での復興朝市事業、③出張朝市をはじめとする地域外事業と学びを挙げた。長い題名になるが、「輪島市内仮設拠点での復興輪島朝市と出張輪島朝市による対外プロモーションとの連動による共感ツーリズムの造成」である。②のメインが今回の「復興輪島朝市×全国軽トラ市 in 輪島」であり、③が11月8日に実施される「軽トラ市 in ジャパンモビリティショー 2025」である。

○事業主催者

本事業は実行委員会形式で実施した。構成員は輪島市朝市組合、全国軽トラ市まちづくり団体連絡協議会（以下、軽団連）、石川

輪島市マリンタウン

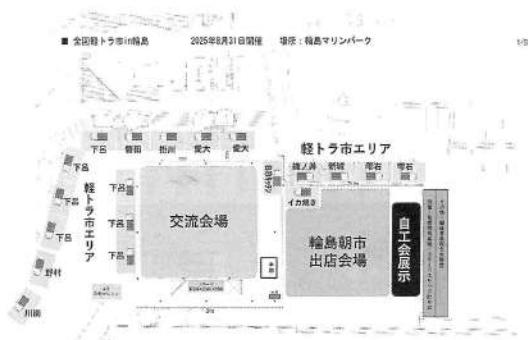


図2 会場の配置

県軽自動車協会、愛知大学三遠南信地域連携研究センターであり、後援団体として（一社）日本自動車工業会、（一社）全国軽自動車協会連合会、輪島市が加わった。事業実施に当たっては、上記観光庁事業による支援を多大に受けている。

2. 事業参加者

○開催環境と対応

開催に向けて最初の課題が、どの程度の人数を市内・市外から期待すべきかということであった。その背景は、宿泊施設の制限、市外から輪島市に至る交通機関の制限、自動車利用を前提とする場合の駐車場の制限である。しかし、輪島の観光復興を考えた場合、それらは避けられない課題であり、安全側を



図3 軽トラ市特産品の出店



図4 軽トラ市ご当地アイドルの出演

見込みながら実施していくこととなった。

まず宿泊施設については、輪島市内の宿泊施設を確保すること、次いで近隣市の宿泊施設への連携を取っておくことである。次に、市外から輪島市に至る交通機関としては、バスチャーターの可能性を備えることであった。最後に市内の駐車場確保についてである。元来駐車可能な用地は仮設住宅となっており、会場近辺での確保は困難であった。このため、市役所、スーパーマーケット、道の駅の各駐車場を利用して、そこから小型バスを会場に運行することとなった。

これらによって想定できるのは概ね2,000人であり、安全側を見れば1,500人であり、市内外の比率は各5割と想定された。従って、通常の全国軽トラ市とは異なり、控えめな対外広報で、市内に対しても短期間の宣伝となった。

会場は、2つの大屋根（30m×30m）を持つ輪島市マリンタウンである。図2が配置図であるが、一つの大屋根内が朝市出店会場、もう一つの大屋根が交流会場、その周辺に軽トラ市出店約20台を配置するものとなった。

○全国軽トラ市出店者

従来は、より多くの軽トラ市団体に参加を



図5 全国軽トラ市のデータや特徴を紹介

呼び掛けるが、空間的に20台が上限であるために軽団連所属団体（40団体）のみへの募集となった。その結果、北から（岩手県）元祖しづくいし軽トラ市、（長野県）しののい軽トラ市、（静岡県）かけがわけトラ市実行委員会、（静岡県）みんなで軽トラ市いわた☆駅前楽市、（愛知県）しんしろ軽トラ市のんほいルロット、（岐阜県）下呂軽トラ市、（愛媛県）のむら軽トラ市・笑心の会、（宮崎県）「定期朝市」トロントロン軽トラ市、そして愛知大学三遠南信地域連携研究センターの17台となった（図3、4、5）。

これら軽トラ市の特徴は、その多くが被災経験を持っていることである。代表的なものを挙げると、零石軽トラ市は2011年の東日本大震災、篠ノ井軽トラ市は2019年の千曲川決壊による水害、自然災害ではないが川南軽トラ市は2010年の口蹄疫である。愛媛県の野村軽トラ市は2018年に河川氾濫にあい、今も復興途上という。名物の「じゃこ天」を提供するため、往復1,600kmを走行してきた。

○輪島朝市出店者

出張朝市は、2024年7月から輪島市内のスーパー・ワイプラザの中に出店している。従来は廊下沿いに出店スペースを持っていた



図6 朝市出店会場

が、2025年7月からワイプラザ奥のスペース（20m×25m）に移動して営業を行っている。ワイプラザは輪島市内ではあるが、恒久的な朝市の場所ではなく、やはり出張朝市である。現在の出店数は42店で、従前朝市の141店には遠く及ばない。

今回の復興輪島朝市は、日本三大朝市の誇りをもって、自らの開催場所確保と出店者回復に繋がるものとして計画された。従って、ワイプラザ内出店の大半にあたる38店が、各店舗をマリンタウン会場に一日移動した（図6）。

○自動車工業会出展

全国軽トラ市では、各種自動車団体からの出展ブースを設ける。今回はスペースが限られるために、日本自動車工業会軽自動車委員

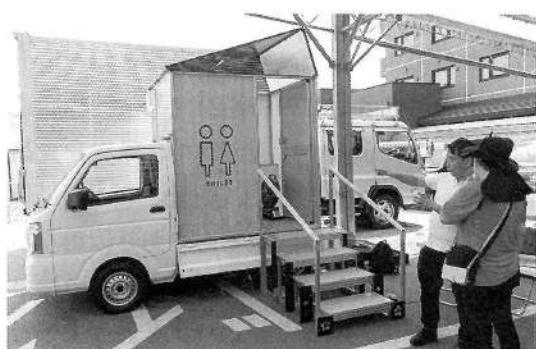


図7 自工会から出店したトイレカー

会が、災害対応の軽トイレカー展示（図7）や軽の災害復旧支援車のパネル展示を通じて、災害現場でも役立つ、軽自動車の有用性を紹介した。

3. 事業プログラム

○輪島朝市・全国軽トラ市交流会の開催

通常の全国軽トラ市は、1日目に全国の軽トラ市が交流する全国軽トラ市サミットを開催し、2日目に来場者を迎える軽トラ市となる。今回は、朝市の方々との直接の交流を行いたいという軽トラ市団体の希望に基づいて、両者の交流会を1日目に設定した。場所は同じマリンタウン大屋根内である。参加者は軽トラ市からの65名、朝市からの30名を中心に140名ほどが人的交流を深めた。現地で顔と顔とを合わせなければ分からぬ交流である。朝市も軽トラ市も、共に対面販売という人間関係の上に成り立つ活動であるだけに、相互の繋がりをつくる重要な機会となつた。また、この会場において輪島市朝市組合の富水組合長から輪島朝市復興ビジョンの中間報告もなされた（図8）。

○復興輪島朝市×全国軽トラ市の開催

翌日の9時～13時が「輪島復興朝市×全国軽トラ市 in 輪島」の本番であり、多くの来場者に対して、相互の商品が販売された。軽トラ市の商品は各地域の特産品であり、輪島市内の来場者にとっては魅力的で、果物や食品は完売が続出した。また、全国からの来場者にとっては朝市の商品が魅力であり、相互の特性が活かされた。交流会場には干物の焼き台などがあり、ゆっくりと時間を過ごす人たちが見受けられた。そこには参加者の笑顔が



図8 富水組合長の朝市復興ビジョン中間報告に聞き入る軽トラ市関係者

あり、朝市と軽トラ市が合同で開催された醍醐味と言える。

また、交流会場では、10時から開会式典が行われ、主催者として輪島市朝市組合の富水長穀組合長、軽団連の相澤潤一氏（元祖しづいし軽トラ市実行委員長）の挨拶、来賓として坂口茂輪島市長、久岡政治輪島商工会議所会頭、日本自動車工業会軽自動車委員会の鈴木俊宏委員長（スズキ㈱代表取締役社長）、軽トラ市開催地の下江洋行新城市長、宮崎吉敏川南町長、また地元国議員等からの挨拶が行われた（図9、10）。いずれの発言からも、輪島朝市復興に向けた熱気が感じられた。そして1日目の交流会と同様に、朝市組合の富水組合長から朝市復興ビジョン中間報告がなされた。会場には軽自動車業界関係者が多く足を運ばれ、輪島朝市復興への関心の高さを示した。

○輪島朝市復興ビジョン

ここで輪島朝市復興ビジョンについて、簡単に触れておきたい。輪島朝市は嘗て最大270万人の観光客があったが、被災前はコロナ禍もあり20万人に減少、また多くの担い手が70代と厳しい状況にあった。そこに被災で



図9 軽団連を代表して雲石軽トラ市相澤氏



図11 「復興輪島朝市×全国軽トラ市」の出店者

図10 自工会軽自動車委員会の鈴木委員長
ある。元に戻る復旧は非常に困難であり、復興つまり歴史的な蓄積を活かしながら新しい朝市構想を考えねばならない。

そこで検討されているのが「輪島朝市2.0構想」であり、その柱は、①能登半島の観光客回復をリードする魅力ある輪島朝市（観光客100万人目標）、②1200年の歴史をつなぐ持続可能な輪島朝市（出張朝市の全国展開等）、③食品衛生法等をクリアするこれからの輪島朝市（大屋根スペース）の3点である。

この①～③を通して軽トラ市の導入に着目しており、軽トラ市やキッチンカーに対応した可動商店街専用道路も提案している。

4. まとめ

当初の懸念であった来場者は、一般入場者

が約1,300人、軽トラ市、朝市、軽自動車業界関係者が約200人、全体で1,500人と想定内で安全側に収まった。100人程度のインタビュー調査を行ったが、インター結果では、市内が5割、市外で県内が2割、県外が3割であった。7割が自家用車利用であったが、交通トラブルは発生しなかった。今後の宿泊施設の回復、交通の整備を勘案しながら、徐々に観光客を呼び込むことへの一つのステップになったのではないか。

また市内来場者の意見として、「私たちはディズニーランドにも行けない、こうして全国から来てくれたのは我々のディズニーランドだ。全ての出店を廻りたい。」と聞いた。観光客を全国から集めると同時に、輪島の人々を念頭に置いた軽トラ市が不可欠だろう。

今回の事業を通して、軽トラ市出店者から多くの意見や提案が集まっており、輪島朝市と軽トラ市の継続的な連携が望まれる。「輪島朝市2.0構想」に寄り添いながら、出来ることから一歩一歩進んでいければと思える（図11）。11月8日の「軽トラ市 in ジャパンモビリティショー 2025」において、こうした共感が広がることを期待したい。